

『モロッコ幻想紀行ープライスレス・メモリーを求めて』

“ 迷宮の古都とサハラ砂漠 麗しのモロッコ 9 日間 ”

〔グローバル・ユース・ビューロー QRM2N〕

出発 平成 17 年 12 月 28 日 (水)

帰国 平成 18 年 1 月 5 日 (木)

添乗員 (TC) : 庄司文子さん

12 月 28 日 (水) 晴れ

日暮里発 9 時 25 分のスカイライナーに乗り、集合時刻の 10 時 20 分ジャストに第 1 ターミナルに到着した。小走りで ABC に行きスーツケースを受け取り、F カウンターへ急いだ。今回のツアーは 20 名参加ということは事前に知らされていたが、意外にも 1 人参加が僕のみであり、ちょっと緊張する旅立ちとなった。TC は庄司文子さん。電話の挨拶と比べ若くて、可愛らしい方であった。

Duty Free で買い物をした後ビジネスラウンジで寛ぎ、12 時 15 分過ぎから搭乗が始まり、13 時 20 分になって漸く離陸となった。AF275 便 (ボーイング 777) の 8A は窓際で、好天のため、富士山や東京湾、その先には三浦半島まではっきり見渡せた。右隣の女性客は連れの人の方に移動して空席となり、広いスペースがゲットされてラッキーであった。

この 1~2 ヶ月間激務に追われ、また、煩わしい出来事に翻弄されたため、この旅行が待ち遠しかった。上空から見える人間世界の細々とした事象が、とてもちっぽけであるように思えて、心の安らぎを感じた。やはり旅に出てよかったと、しみじみ感じた。機内映画で久しぶりに『フォレスト・ガンプ - 一期一会』を観たが、“ 前へ進もうとする時は、過去を置いて行け ” というセリフがあって、思わず納得させられた。16 時 30 分を過ぎると、シベリアの大地に沈む夕陽を見ることができたが、とっても寒そうな落日であった。

日本時間で 29 日の深夜 1 時 28 分 (パリ時間 17 時 28 分)、シャルル・ドゴール空港に着陸した。12 時間とちょっと、9700km のフライトであった。空港での自由時間は、免税店を巡ったり、ラウンジで寛いで過ごした。パリ時間 20 時 30 分に F44 に集合して、モロッコ行き AF1696 便 (エアバス 320) に乗り継いだ。

パリ時間の 23 時 38 分 (モロッコ時間 22 時 38 分)、カサブランカの空港に着陸となった。予定より 30 分も早く嬉しかった。われわれの他、空港には日経カルチャー・ツアーと阪神のフレンドリー・ツアーも来ていた。グローバルは成田から 14 名、パリで 6 名合流して 20 名となった (阪神のツアーとはその後たびたび出会った)。

われわれの中にスーツケースが届いていない方がいて、カルーセルの所でし

しばらく待たされたが、すばやく両替を済ませて観光バスに乗車した。パリよりだいぶ暖かく感じた。

現地ガイドはフワドさん（41 歳）、ドライバーはアフメッドさん（37 歳）、ドライバー助手はモハメッドさん（1 月 1 日で 32 歳）という紹介に続き、庄司さんからモロッコのお金（ディラハム）や、枕銭、飲料水などについての説明があった。

ハイアット・リージェンシーのある国連広場に面したカフェでは、深夜 12 時を廻っているにもかかわらず、テラスでお茶している人もいて驚いてしまった。ホテルに入ると、すぐ左手にバー・カサブランカがあり、はるばるやって来た実感が湧いてきた。



（バー・カサブランカ）



（ハイアット・リージェンシー）

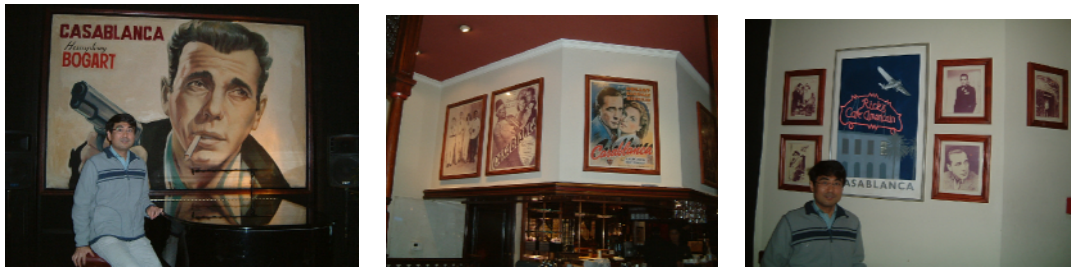
カードキーが不調のため交換してもらったので、部屋に入ったのは 1 時になってしまった。家に電話し（1 分弱くらいであったが、88DH もした！）、すぐに入浴したが、就寝は 2 時頃（日本だと朝の 11 時だよ）。今までで最西端に至る長旅は、ちょっと疲れた。

12 月 29 日（木） 晴れ（暖かい！）

8 時にモーニング・コールがあり、すぐに朝食（バー・カサブランカ）に向いた。『Rick's Café American』を再現しているこのバーの、ハンフリー・ボガードの絵の前などで写真を撮った（最近では写真を撮りに来る観光客が多いため、入場料を取っているとか）。中はカウンターがあって、なかなか洒落た造りになっていたが、映画のバーに比べると小さいようであった。

朝食後、出発の 9 時半までホテルの周りを少し散策したが、車の排気ガスが鼻をつき、以前アンマンでも同じような思いを体験したことが思い出された。

バスの出発待ちの間、ロビーでフランクフルトからのドイツ人旅行者と会話をしたが、ドイツから船旅を楽しんでポルトガル経由でモロッコに入り、その後は地中海の島々を巡って新年にドイツに戻るとのことであった。とても優雅な感じがして羨ましかった。フランクフルトの寒さに比べ、カサブランカは別世界のように話していた。



(バー・カサブランカにて)

カサブランカ観光はハッサン2世モスクから始まった。メッカ、メディナについて世界で3番目に大きいモスクであり、“神の座は水の上にある”というコーランの一節から考案されて造られ、2/3が海（大西洋）の上、1/3が陸上に建てられているという。内部には2万5千人、広場を入ると8万人も収容可能で、ミナレットは200mもあって世界一の高さを誇り、その先の3つの玉は神と人、そして両者をつなぐ天使を表しているという説明があった。



(大西洋に突き出すように建造されているハッサン2世モスク)

モロッコ全土から多くの職人を集め、シャンデリア（ムラノガラス）以外はすべてモロッコ産の材料で建造され、柱は南モロッコ製の大理石で、漆喰はフェズの職人、天井は寄木造り、床下暖房もあり、男性は1階、女性は2階でお祈りするといった説明が続いた。また、天井は開閉可能であり、開くのに3分、閉じるのに2分30秒かかるということであった。

地下には身を清める泉やハمام、喫茶室などがあり、このモスクを訪れる人々に対する配慮が感じられビックリした（実際にはこれらは未使用とのこと）。また、現地ガイドのフワドから、ミラバルによる音響効果や実際のお祈りの仕方、身の清め方などのデモが行われ、石を使った身の清め方についても説明された。

モスクの敷地内には、図書館や神学校などが併設されているが、これだけの施設が国民の寄付金と税金によって建てられたというのが、信仰のために徴収される高い税金について考えさせられた。因みにハッサンというのは「善」を意味するという。

11時にバスは出発し、カサブランカの港地区を進んでいった。“白い家”を意味するカサブランカは、1943年にチャーチルとルーズベルトの会談が行われ

た際に、ドイツのスパイを欺くために“ ホワイトハウス ”で会談するという暗号が流されたそう。アフリカ最大の貿易港であるカサブランカは、国の経済を支えるリン鉱石や農産物の輸出港としても重要な役割を担っているのとのことであった。また、市内の人口は 400 万人と言われているが、500 万人位はいるのではないかと説明された。

今日は久々の晴れということだが、暖かな日差しを受け、左側に大西洋を見ながらバスは進み、羊や牛の放牧が見えてのどかな印象を受けた。

庄司さんからモロッコの歴史年表が配布され、その説明の後しばらく休憩タイムとなったが、森が見えてきてラバトに近いことが感じられた。

11 世紀のムラビト朝のとき最初に栄え、フランスの保護領となって首都に定められたラバトは、人口 175 万人という説明などの後、大西洋に面したレストランで昼食となった。シーフードのフライやアイスクリームはまあまあであったが、ミントティーは甘い歯磨き粉の味がして不気味であった。白いしぶきを上げる荒波の大西洋の岸壁では釣りをしている人もいたが、何が釣れるのだろうか？



(荒々しい大西洋と灯台)



(ムハンマド 5 世廟とハッサンの塔の入り口と内部)



14 時 05 分に出発し、右手にイスラムの墓地を見ながら進み、同じ敷地内にあるムハンマド 5 世廟とハッサンの塔を訪れた。フランスからモロッコの独立を勝ち取った元国王ムハンマド 5 世の霊廟は 1961 年に没後、1973 年に完成した。廟の隣の緑の屋根の建物がモスクで、ハッサンの塔がミナレットの代わりとなっているということであった。入り口には真紅の衣装をまとった騎馬兵がいて、廟の内部は美しく装飾されていた。中央にムハンマド 5 世の、その両側には前国王ハッサン 2 世と彼の弟ムーレー・アブドゥラー王子の石棺が安置されていた。脇に座っている人はコーランを吟じているとのことであった。

ハッサンの塔は、12 世紀に建設の途中で放棄されてしまった 44m の未完のミナレットで、スペインのヒラルダの塔 (97m)、マラケッシュのクトゥビアの塔 (77m) について世界第 3 位の高さという。青空と大西洋のブルーをバックに美しく映えていた。塔の南側にある 360 本の大理石の柱は、モスクの跡なのだそう。この建物の周囲の城壁は 1755 年のリスボン大地震であちこち崩壊しており、ところどころに模様ともつかない小さな穴が開いてあったが、これらは工事の足場ということであった。



(ハッサンの塔と城壁を守る騎馬兵。工事の足場跡もみえる)

(王宮)

再びバスに揺られ、左手に 18 世紀に建造されたグランモスクを見ながら王宮の見学となった。1864 年に建てられたラバトの王宮は、敷地 44ha で、400 家族が住み働いているという。内部は未公開なので門の前まで行き、首相の執務室、迎賓館、図書室といった王宮コンプレックスについての説明を受けた。ジュラバをまとったねずみ男のようなメッセンジャーも見えた。快晴で青空が美しかったが、大西洋からの風は冷たかった。

王宮内の庭の左手にアフリカン・チューリップの木やモロッコ国防省を見ながら 15 時 10 分に出発した。城壁を出て、シエラ（新市街の南にあるローマ時代の遺跡）を過ぎ、バスは一路メクネスを目指した。庄司さんから、現国王モハメッド（ムハンマド）6 世から奥さんや家族を公表するようになり（それまでは全くのシークレットだったが、現在は奥さんと 1 歳半の男の子がいる）、開かれた王室となったという話に続き、モロッコ内には約 10 の王宮があるが、現国王と家族はほとんどサレの町の郊外にある王宮にいるという説明とともに、その前を通り過ぎた（警備兵が見えた）。

王宮の隣の造幣局や競馬場などが過ぎると、左右にはコルク櫟の林が続いた。この辺りのコルク櫟林は 11 万 3 千 ha にも及ぶという。続いてオーストラリア原産のユーカリの木が目につき出すと、葉の形状が雨の少ない地域に適しているという説明があった。その間バス内では国王とサルマ王妃の婚姻の写真と 2003 年 5 月に挙式したという新聞の切抜きが廻ってきた。王妃は幼くして母親を失いお祖母さんに育てられたとか、妹がいるという話だった。それにしても王妃は美人。彼女は愛知万博に一人で来日（モロッコデーに合わせて）したというが、その日に行ってみたかった！

右手に広がる穀倉地帯を眺めながら、庄司さんからのモロッコは国土の 48% が耕作地で、その 70% が小麦畑である等との話に続いて、ブドウ畑が見えてくると 17 世紀に栄えた古都メクネスは間もなくであった。メクネスとは『オリブのメクネッサ族の町』という意味で、モロッコで 5 番目に大きな街とのこと。気候の良さと水の美味さ、そしてブドウ畑とくればワインの名産地！

17 時近くに国立大学を右手に見て少し進み、木曜の門を通して城壁内に入った。メクネスの王宮の壁を前に左折して少し行って停車した。マンスール門は

イスラム教に改宗したキリスト教徒マンスールの設計による、青と緑のモザイクで彩られた門である。メクネスの最盛期（17 世紀）であるアラウィー朝のムーレイ・イスマエルの時代に、古い建物を破壊し、多くの城壁や門、モスク等が建設されたというが、この門も、ローマ遺跡の大理石を使用して建造されたという。通りを挟んだエディム広場には、夕方ということで多くの人が集まっており、ガチョウの卵を並べて“がまの油売り”のような口上もやっていた。フワドによると“Traditional Medicine”とのことであった。

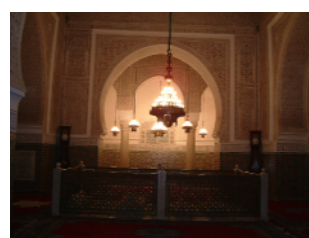


（マンスール門をバックにフワドと）



（にぎやかなエディム広場）

バスに戻り、両側をどっしりした高い壁で囲まれた直線の道「風の道」を通ってムーレイ・イスマイル廟を訪れた。



（壮大な王都建設を夢見て、その完成を待たぬまま逝去したムーレイ・イスマイルの廟）

入口の門の上にはイスラム暦 1082 年に建造がスタートされたということが記載されており、それをくぐっていくつかの部屋や中庭を進んだ。靴を脱いで清めの泉の部屋に入った。メッカの方向に向いたミヒラブでは、フワドがエコー効果を実演してくれた。ムーレイ・イスマエルが眠る部屋は垣間見るだけであったが、神秘的な黄色い壁はこの辺りの土の色のせいだという。ルイ 14 世から贈られた時計があったが、カイロのモハメッド・アリ・モスクにも、コンコルド広場にあるオベリスクのお返しの時計があったことを思い出した。モスクにはお祈りの時間を計るために日時計があるという説明があったが、間もなくアザーンが聞こえた。

17 時 50 分にメクネスを出発した。すっかり夕闇につつまれ、「風の道」にも照明が灯されていた。GS でトイレ休憩した後、高速を跳ばし、19 時少し前にフェズのホテル「ジュナン・パレス」に到着した。このホテルのエレベーターはガタガタ揺れ、今にも止まりそうで恐ろしかった。

12月30日（金） 曇りのち晴れ

朝早く、アザーンと思われる叫び声で目覚めてしまった。5時半を廻ったところであった。今日はイスラムの聖なる金曜日なので、お祈りも早くから行われるのだろうか、などと考えウトウトしていた。昨夜は11時頃に眠ってしまったこともあって、結局少し早めに起床してしまった。

東の空には朝焼けのオレンジ色が広がり、上空は少し厚めの雲に覆われており、ちょっと心配な天候であった。しかし、朝食後は薄日が射ってきて、ミドル・アトラスの方向が明るかったので、何とかかなりそうな予感がした。

9時07分にバスは出発した。サバー・ハリヘールのあいさつも、何とか口を出るようになった。まずは南の砦にてフェズの街を一望した。右側から9世紀に造られた旧フェズ、14世紀に建設された新フェズ、左手奥がフランス保護領時代（20世紀）に造られた新市街で、フェズ川がアンダルシア地区（東側）とカイルワン地区（西側）を分けている等の説明があった。リフ山脈のはじめとなるザラーク山や、後ろにはミドル・アトラス山脈が美しく見えていた。

バスで移動して、フーカ門から旧フェズ（メディナ）に入った。庄司さんとフウドが赤い折りたたみ傘を掲げて先頭を歩き、最後尾にはサブ・ガイドのモハメッド（禿のおっさん）がついた。とにかく、入り組んだ細い道に人やロバ、リヤカーが所狭しと行き交い、ビックリしてしまった。



（果物屋さん）



（ケーキ屋さん）



（鶏売りのおじさん）

庄司さんからは、迷子になったら絶対にその場所を動かないで！と強い注意があったが、こんなところで迷ったら大変だ！ガイドイヤーホンからの説明を聞きながら、メディナの店をキョロキョロし、ロバやラバ、馬、リヤカー等を避けつつ、グループに遅れないよう歩いた。



（バラク！）



（昔の隊商宿は小麦市場に）



（羊とエスカルゴ）

果物屋、ケーキ屋、チキンマーケット、隊商宿、エスカルゴ屋さん、歯科医

院等を見物し、アンダルス・モスクに到着した。



(歯科医院と義歯の陳列ケース - 金属床もある)



(アンダルス・モスク)

このモスクとカラウィン・モスクは、チュニジア人のお金持ちの姉妹によって各々9世紀に建造されたという。アンダルス・モスクはコルドバから来たアンダルシア人のために造られたそう。2年ほど前に修復されているとのこと。

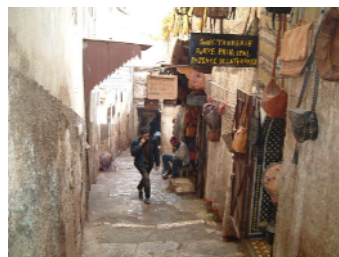
焼きたてのパンを試食し、やたらにナイキのシューズ(本物?)が飾ってある靴屋さんや、縫製屋(シンガー・ミシンを使っていた)を見ながら泉を抜けて行った。高床式の靴の修繕のおじさんに庄司さんがミントティーをごちそうになったり(まずそうな感じだったけど・・・)、チーズ屋さんでは、モロッコではフェズから北しかチーズがないという説明があった。フェズ川の太鼓橋を渡ってカラウィン地区に入った。



(泉にはロバがいた)



(庄司さん頑張ってる - エライ!)



(スーク・タンチェリ)

スーク・タンチェリを通り、真鍮の意のあるサファリン広場に出ると真鍮細工の店が並んでいた。



(真鍮細工店)



(カラウィン図書館)



(牛の角のくし店)

ハمام、イスラム神学校、泉、モスク、パン屋さん、というのが小地区の5大要素であり、カラウィン図書館にはコーランが5万冊あるという説明に続いて牛の角製の櫛店を過ぎた後、イスラム暦1177年にフェズに来たアメフト・

スカリー（シチリア人）という聖者の廟を見て、ナメシ皮工房に入った。入口でミントが配られ、それを嗅ぎながらテラスへ進んだ。バッグ、ベルト、皮ジャン、スリッパなどの商品が所狭しと陳列されていた。テラスからは色とりどりの桶が見られ、その中に浸かって皮を染めている人が見られた。緑はミント、茶はヘンナ、黄色はサフランといった、自然染料で染めるということであった。気温が 40℃にもなる夏だと、臭くていられないという話であった。冬でこの臭いだから、確かに夏はひどいだろうと感じた。

小ぶりの皮バッグを見ていたら、はじめは70ユーロor\$85という話であったが、\$20 なら買ってもいいよ、と答えると “Max いくら?” としつこく付きまとわれた。結局、出発間際に \$20 で OK となったので、仕方なく購入してしまった。“貧乏プライス!”



（タンネリのなめし皮工房～夏だったら物凄い臭いだね!） （アッタリーン・マドラサ）

続いて 14 世紀に建造されたアッタリーン・マドラサ（神学校）を訪れた。寄宿制の学校として使われ、6~7 歳以上なら入学 OK で、4~5 年から 10 年間位、常に 30 人位の生徒がいたとのこと。コーランを全て暗記しなければ卒業できないという厳しさであり、卒後はカラウィン大学に進んだそうだ。また、成績によって部屋が異なり、優秀な生徒は広くて明るい部屋で寝起きできたという。教員室はモスクになっているとのことであった。

カラウィン・モスクは本日、閉門されており、素晴らしいといわれる中庭を見ることはできなかった。ここは北アフリカ最大のモスクであり、世界最古の大学のひとつであったということである。この辺りの混雑はひどく、カイロのハンハリーリ・バザールの残酷版という感じであった。



(織物職人)



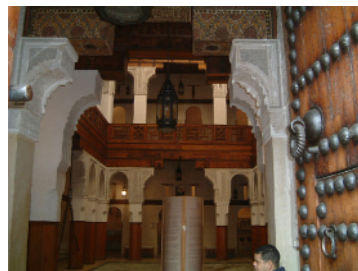
(パン屋さん)



(なつめやし・いちじく等)

再びスークの雑踏に入ると、様々な商店が次から次へと視界に入ってきたが、ロバや馬等の侵入禁止の木のバーをくぐって聖域に入ると、右側がムーレイ・イドリス廟であった。金曜の礼拝を待っている人がダラダラしていた。ここはフェズの守護聖人であるムーレイ・イドリス 2 世の墓があり、今でも民衆の厚い信仰の対象になっているという。そう言えば、この辺りはちょっと落ち着いた雰囲気があり、廟の参道には蝋燭が売られ、聖域という雰囲気を醸し出していた。

バーをくぐって聖域を出ると、ネジャーリン（大工の意）広場であった。そこには美しいモザイクの泉があり、その先は昔の 5 ツ星隊商宿で現在は木工博物館になっており、内部を一枚撮ってきた。



(ムーレイ・イドリス廟) (木工博物館 - 昔の 5 ツ星隊商宿) (ランプと陶器の店)

ネジャーリン・スークには、花嫁が座る金ピカの椅子をはじめ、様々な家具も作製、展示されていた。そこから青果市場、肉屋、魚屋などを抜け、さらに小学校を右手に見てバスに戻った。途中、子供たちがストリート・サッカーをしていたり、ボールペンをくれと言い寄ってきたりした。



(金ピカ椅子)



(広場では子供たちが遊んでいた)



(フェズの小学校)

振り返れば短い時間であったが、とっても密度が濃く、強烈な印象を与えて

くれた、疲れるメディナ散策であった。金曜日は休みの店が多いとのことであったが、あれ以上混雑していたら、迷子になってしまったかもしれない。また、数々の香辛料とロバや馬の糞などが入り混じった、何とも言えない香り（臭い）が鼻を突いて臭かった。

13 時 10 分より昼食。狭くて急な階段を 4 階まで上らされたが、昔の邸宅を利用したレストランで、宿泊もできるということであった。1 階で作られる料理を 4 階まで運ぶのは、物凄い重労働だし危険だと思うのだが……。そろそろモロッコ料理も飽きてきたので、このお昼からチューブ入り生わさびを使い始めた。また、この辺りは果物が美味しいということだが、デザートに出されたオレンジは美味しかったがリンゴは軟らかくて歯ごたえ不足であった。



（吹き抜けになっているレストラン）



（宿泊可能という部屋の内部）

15 時を過ぎてレストランを出る頃には、午後のお祈りを告げるアザーンが響いていた。バスで 14 世紀に造られたフェズの王宮に向かった。

王宮の門は OK だが、左側の紫の門は警察の施設なので写真は NG という注意に続いて、庄司さんから 1961 年のハッサン 2 世の即位を記念して、7 年目の 1968 年に造られた 7 つの門についての説明があった。7 はイスラムでも縁起の良い数字であり（神は 7 日間かかって世界を創造した等）、モハメッド 6 世が来た時のみに門が開かれ、88ha（ラバトの王宮のちょうど倍の広さ）ある敷地にはゴルフ場、テニスコート等があるという。青銅の扉はレモンでこすると輝き続けるそうだ。メクネスの王宮にもゴルフ場があったが、モハメッド 6 世はゴルフ好き？



（ピカピカ輝いている王宮の門）

15 時 30 分、バスはモロッコで一番古いユダヤ人街（メラー～塩の街の意味～ユダヤ人達が塩の取引をしていたことから～現在ではほとんどユダヤ人は住

んでいない)を抜けて、王宮の壁を右側に見ながら進んだ。左手に墓場が見えると、顔がメッカの方向に向くよう横向きに埋葬されているとの説明があった。

ほど無くしてブー・ジュルド門に至った。14世紀に建造され、フランスが修復を重ね、1962年に最後の修復がされたという。凱旋門のようなモニュメントにしたかったとのこと。門のフェズ・ブルーとアーチの中に2つのミナレットが見える光景は絵になっていた。

門をくぐってから短いフリータイムとなり、その時ポストカードを購入したが、良いのがなくて残念であった。ケバブを焼く匂いが、メディナにいる臨場感を盛り上げてくれた。



(フェズ最大のブー・ジュルド門) (門の裏側はイスラム色の緑が美しかった)

王宮の門を手がけた職人がいるブロンズ工房を見た後、混雑したメディナに入って左右の店を見て廻ったが、マネキンの目や眉が黒くマンガチックに描かれていたのが可笑しかった。くつ屋、パン屋、かばん屋、チーズ屋、洋品店、下着店などが続いた。2人の女の子が出迎えてくれて、一般家庭訪問となった。

まさか、こんな狭い道、こんな暗い道!といったところを抜けて、ファティマさんの家に辿り着いた。彼女の夫は仕事に出ており、14歳のフーダ、11歳のシャイナ、そしてもう1人、4歳の子は留守ということであった。こんな迷路のような狭い路地裏の家なのに、中が吹き抜けになっていて、思ったより明るいのは驚いた。

ファティマさんのお姉さんのアッシアさんから本場のミントティーをごちそうになったが、まず、グリーンティーを入れて中国茶を加え、ちょっとお茶葉を拵げてから砂糖を入れ、最後にミントの葉を加えて煮立たせるということであった。夕方になって少し寒さを感じた身体に、ミントティーは嬉しかった。

フーダは英語が通じたので、彼女といろいろ話したが、3歳の時のシャイナの写真やお父さんの写真を見せてくれた。また、彼女達の上にも、既に嫁いだお姉さんがいることを教えてくれた。また、彼女たちの冬休みは12月29・30・31日の3日間なのだそう。奥の部屋にはTVの他に、DVDやビデオなどもあり、このような家にはちょっと不釣り合いだなあと感じた。

この家でヘンナの体験タイムがあったのだが、誰もトライする方がおらず、庄司さんがデモを行うことになった。



(ミントティーの実演)

(シャイナ〔左〕とフワダ)

(庄司さんのヘンナ手)

ヘンナの耐用期間はどれ位時間をかけて描いたかによるとのこと、15 日間くらいは大丈夫だそう。実際、シャイナの爪には 12 月 7 日（ラマダン明けのお祭り）に施したヘンナが茶色く残っていた。

再び超狭い路地を抜けてメディナを進んでいった。途中、香料店でヘンナが売られていた。17 時 40 分にバスに戻り、現在は武器博物館になっている北側の砦を見ながらホテルに戻った。



(ライトアップされた北の砦)

(バースデー・パーティー)

(サーナ・サイーダ！)

18 時過ぎに部屋に戻り、湯船に少しお湯をはって足湯をした。結構歩いたので、とても気持ちよかった。TV をつけたら『007 ロシアより愛をこめて』をやっており、イスタンブールの地下宮殿などが出てきて懐かしかったが、アラビア語の字幕は邪魔であった。

19 時 30 分にホテルを出発し、10 分程で“ラ・メゾン・ブルー”というレストランに到着した。雰囲気もあって、なかなか立派であった。鳩の挽肉のパイ包みが美味しかった。挽肉にしてみると、鳩でも誤魔化せるんだ。ハシュブシュという楽器の演奏とマリ起源の踊りをやっていたが、ジャズの前形とも言われているそう。また、唐突にわれわれのツアーの誕生会が開催された。僕を含め 4 名の方が、このツアー中に誕生日を迎えるという。サーナ・サイーダとフワダのサインが描かれたケーキが 4 つ贈られたが、お腹が一杯でほとんど食べられなかった（実のところ、あまり美味しくなかった！）。また、庄司さんから素敵なバースデー・カードを頂いたが、サーナ・サイーダとカシマケンジという名前、それにフワダのサインがアラビア語で記載されていた。

メディナの喧騒からバースデー・パーティーと、とても慌しく過ぎていった 1 日であった。長いディナーが終わりホテルに戻ると 10 時過ぎ。アトラスを越え

ると郵便事情が悪くなるということで、大急ぎで絵ハガキを数枚書き、すばやく入浴して、11時半過ぎに就寝した。

12月31日（土） 曇りのち晴れ

昨夜書いた絵ハガキをフロントに託してバスに乗車すると、8時30分にホテルを出発してジャカランダの並木道（中央分離帯にはオレンジ）を進んで行った。メディナの各家庭には釜戸がなく、家で作った生地をパン屋に持って行って焼いてもらっているの、パン屋さんが各地区の住民を把握しており、パン屋さんに聞くと各地区のことがよくわかると、早速、庄司さんから説明があった。また、あのよう狭いところでは、家具や電気製品は屋根づたいに運ばれることもあるそうだ。また、ハムムについても入浴料は男10DH・女20DHという話があった。

左右にオリーブ畑の続く道をミドル・アトラスに向かって進んでいくと、次第に陽が射してきて、青空が広がっていった。9時10分過ぎにイムゼル村を通過し、その後りんご畑、櫟の林などが続いたが、この辺りは1940年までライオンも生息していたという。

山を登って進むと、赤い屋根のイフレン大学（モロッコで唯一の私立大学）が見えてきた。イフレンは人口2万～2万5千人、モロッコのスイスと呼ばれる高級リゾートで、物価もカサブランカについて高いということであった。夏は避暑地として、冬はスキーの基地となっているそうだ。トイレ休憩とともに、フランス人によって造られたライオンの像と一緒に写真に収まった。“高級”リゾートだからか、ベンツやBMWなどのドイツ車が目に付いた。



（ライオンの像） （モロッコらしくない町並） （アトラス杉と羊の群れ）

10時05分に出発すると、すぐに王宮を左手に見たが、モロッコ国内には王宮は10、レジデンスを含めると25位あるという。左右にアトラス杉の生い茂る道を抜けると平原が広がり、羊の放牧風景などが見られた。だだっ広い草原には、時々、動物用の風除けの壁が見られた。

ミドル・アトラスが近づくにつれ、雲が流れて快晴となった。庄司さんから、7世紀頃アラビア半島から進入してきたアラブ人が、先住民のことを“わけのわからない言葉を話す野蛮な人”という意味で名付けたのがベルベル人で、ブルーマンやトゥアレグ、ノマドなどについても説明があった。また、“日の出ずる国から日の沈む国（マグレブ）に行った黄色民族がいるという日本の神話から、ベルベル人の祖先が日本人であるという説を唱える学者もいるということ

であった。さらに、リフ山脈の方に住むベルベル人は白い肌なので、北欧系と考えられているといった話も続いた。ベルベル語は文字がなく、口承のみなのではっきりしたことはわからないそうだ。

途中、2178mのザード峠（今回のツアーで2番目に高い所）を越え、万年雪を頂く3737mのエアシ山などを見ながら、ザイナーという小さな町を過ぎ、フォト・ストップをはさみながら進んだ。狼との混血の犬も車窓から見る事ができた。山肌にアッラー・神様・王様という3つの言葉（三位一体）が書かれているところも過ぎた。



（2178mのザード峠）



（ミドル・アトラスをバックに）

さらに、アトラスはヘラクラスが退治したメドゥーサと目があって石になってしまい、この地で天空を支える山脈となったという伝説があるといった説明などがあり、その後、ミデルトに入った。ベルベル語で“真ん中”の意のミデルトは、アルジェリアへの道を確保するためにフランス保護領時代ベルベルの村だった所に造った町で、この周辺には人工湖が多くて鱒を養殖しているという。また、この辺りはリンゴやアプリコット、プラムなどが有名であるとのことであった。

昼食にカスバ風のレストランで鱒のグリルが出されたが、軽くて美味しかった。牛肉の方は堅くて不味かった。

13時50分にバスは出発した。月2万円がモロッコの最低賃金であり、3万円位が平均で、警官は2000DH、高校教師が\$350、大学の教員で\$500～600といった話を聞きながら、1907mのラクダ峠を越えた。『アラブを理解するにはアラブ人になること』とか、日干しレンガの家の説明などとともに右下にジーズ川が見え、1930年にフランスの外人部隊によって造られた掘りっ放しのトンネルをくぐった所でフォト・ストップとなった（15時15分）。



その際、オランダから来た観光客と話したが、彼は 20 年ちょっと前に日本に来たことがあるが、そんな遠いところからモロッコまで長時間かけてよく来たな、と笑っていた。

映画「モロッコ」のサントラ曲を BGM に、庄司さんが明日のラクダの集金（\$33）に廻った。赤茶けた不毛の土地が続くが、ジーズ川の流れはダム湖へとつながっていった（ハッサン・アッダヒール・ダム）。ダムを過ぎると、道の左側にテントがあり、それより左側では鷹狩りをやっていて、そこに行かないようにコントロールしているという説明があった。鷹狩りなんてのは王室とか大金持ちがやることだろうが、この国は貧富の差が激しいのだろうなあ。



（左下のテントの向こうは鷹狩り場）



（不毛の大地と青空が対照的）

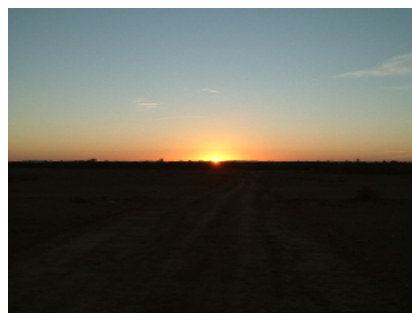
15 時 50 分から 15 分のトイレ休憩をはさんで、再びバスはエルフードを目指した。モロッコには大きなダムは 10、小さなダムは 450 あるとか、北の一部で風力発電が行われているが、ほとんど水力発電であるといった説明を聞いていると、人口 5 万のエルラシディアの町に入った。町中の道は比較的広い割に車は少なかったが、何ヵ所かで警官がスピード違反か何かの取り締まりをしていたのが目に付いた。また、道の両サイドが軍事基地になっており、写真は厳禁であった。

モロッコは教育費が掛からない代わりに、大学を出た後、2 年間役所等の公共の施設に半額の給与で勤務するとか、公共の病院は無料（薬や手術代は有料）であるとか庄司さんの話が続いた。左手にドメスティックの飛行場が見え、小さな飛行機も見えた。また、夏の暑い日に砂丘に出て、10 分間砂風呂に入るとリウマチに効果的と言っていたが、すごく辛そうな温熱療法だね。

しばらく進んで、ズィズ渓谷のオアシスで休憩となった。ここは一面、ナツメヤシが生い茂っており、将に“オアシス”といった感じであった。この谷の上に『ハムナプトラ』のピラミッドが！ オアシスはエルフードまでずっと続いているということであった。モロッコ国内には約 40 種類のナツメヤシがあり、1 本から 100kg の実が取れ、実は栄養価が高いそうだ。江崎さんからナツメヤシの差し入れがあって、2 コごちそうになったが、甘くて美味であった。

青空が高くて美しかった。16 時 50 分に出発し、クサルを見ながら進み、ディーラ村の近くで 2005 年の日の入りを観賞した。17 時 21 分であった。残照

の中を、バスは一路エルフードに向かったが、庄司さんからラクダの乗り方の説明が行われた。



(ズィズ峡谷のオアシス - 『ハムナプトラ』で使用)

(2005 年最後の日の入り)

エルフードは7世紀頃からある古い町で、17～18世紀にアラウィー王朝の首都となってから栄えたという。日干しレンガで囲まれた町はクサル形式の家が多かったが、独立後はコンクリートの建物が増加したそう。17時45分にホテルに到着した。コテージ風の美しいホテルであった。鍵が安物なのか、なかなかドアが開かず、部屋に入るのに一苦労した。

荷物の整理や足湯などをして、20時30分にロビーに集合し、カウント・ダウン・ディナーとなった。ブッサ・ハップ（乾杯）の後、小麦のスープに始まり、アボガド・エビ・コーンのアラカルトや春巻、コラーゲンたっぷりの（繊維質で堅い）羊のグリル、ロイヤル・クスクスなどが続いた。カウント・ダウンまで頑張ったかったが、疲れたし、明日も早いので23時に退席した。しかし部屋の鍵が開かなくて、再びロビーに戻って係員に開けてもらったりして時間がかかってしまった。



(ロビー前では現地の音楽でお出迎え)



(パーティーはちょっと退屈した)

1月1日（日） 快晴

サーナ・サイーダ！

4時45分にモーニング・コールがあり、まだまだ暗い5時15分に出発した。道なき道を約50キロ、4WDで跳ばして1時間ちょっと走った。6時半頃からラクダに乗って、サハラ砂漠の北端に当たるメルズーガ砂丘を進んだ。サハラとは‘荒れ果てた地(砂漠)’という意味だそうだが、中国のタクラマカンの‘二度

と生きて帰れない所'よりもましなのかな、などと考えた。砂丘の高い所まで行き、日の出を待った。そこからは遥か遠方(約 60km)にアルジェリアも見渡せた。2006 年(平成 17 年)の初日の出は7時 20 分であった。



(砂の上に座って待機)(素晴らしい初日の出ーパーフェクト!)(ラクダは4回目?)

ラクダ使いの若者から、アンモナイトなどの化石を買うよう要求され、いくつかのセットで\$20 ということであった。あまり価値があるように見えなかったの値切ったところ、生活が苦しいのでヘルプ・ミーと懇願されてしまい、仕方なく、化石やネックレスとか、あるもの全部をサービスさせて、\$2 のチップ込みで\$20 を支払った。それにしても、ラクダの値段が\$33 というのは高かったな。あの距離では歩いても大した事無かったし。また、できれば『アラビアのロレンス』のように、ひと瘤ラクダに右足を廻して乗りたかった・・・。

その後、再び4WD に乗り、砂丘の中にある「オーベルジュ・マリア」というイタリア人が経営するレストランで朝食となった。“マリア”とは奥さんの名前だという。ここはクレープが美味しかった。レストランを出たところでは日干しレンガが造られていた。

9 時 05 分に出発して4WD で砂漠を走り抜けて、9 時 50 分にホテルに戻った。途中、町中で市が開かれて羊が売られていた。



(4WD の砂漠ドライブ)

(ホテル・ベレーレは砂漠にあるとは思えない)

10 時 36 分にバスは出発し、一番前(2 列目)に陣取った。バスの中では、庄司さんから化石とサハラの砂、バラのポプリ、そして年賀状が配られた。ヨルダン(ワディ・ラム)とエジプト(サッカラ)の砂に加え、サハラの砂をゲットし、とても嬉しかった。

10 時 55 分にエル・ジョルフという小さな町を通過したが、アラブ人が住む最後の町で、この後はベルベル人ばかりになるということであった。この辺り

の女性が身にまとう黒い衣装はイスラムとは関係なく、元々はサウジアラビア辺りのものであったという。黒は男性を誘惑しない色であり、暑さよけと口唇を見せないことがエチケットなのだそう。因みに、白い衣装は未亡人用ということであった。

右手のクサルに窓があるのが見えたが、元々クサルには窓はなく、後付けされたものだという。庄司さんから、クサルとカスバの違いが改めて説明された。

- ・ クサルは集合住宅で、一族郎党が住んで、外壁や見張り台を作って外敵の侵入を防いだ。要塞化された村である。
- ・ カスバはキャスル(城)のことで、長や地主が住んでいる要塞を兼ねた住宅で、穀物倉も備えて4隅に塔がある。

少し行った砂漠の真ん中に、アトラス山脈から水を引いて、生活用水や灌漑用に用いたフッターラという地下水路を汲む井戸があり、バスを降りて見学した。



(フッターラの周囲は月面のような風景が拡がり、映画のロケには持って来い！)

フランスが来てダムが建設されたり、井戸を掘る高度の技術が導入されたりして、現在ではフッターラは使用されなくなってしまったという。また、前年の3月、この辺りに3cmほど雪が積もったというが、それって異常気象だよね。

仕事をするのはオスのラクダで、メスを知ってしまうと気が荒くなってしまうのでメスを遠ざけるとか、睫毛が長く上唇が2つ(下唇は1つ)あるので、トゲのある植物も食べられるとか、非常に記憶力が良いので密輸に使われることもあるとか、庄司さんの話を聞きながらバスは進んだ。さらに、ラクダは300~400kgの荷物を積み、水なし・食事なしでも15日~1ヶ月は大丈夫という説明も続いた。

サハラ砂漠は日本の20数倍でアフリカの1/4を占め、そのうちエルムと呼ばれる砂丘は1/5で、残り4/5は岩や砂利などゴツゴツしたものがあるハマダというところなのだそう。アトラス山脈が湿った風を雨に変えるため、北モロッコは砂漠化せず、肥沃な土地となっているとのこと。

ティンチネット村でトイレ休憩となり、絵ハガキを購入した。ここは新しい町なので、ブロックやコンクリート造りもみられるが、日干しレンガに比べて

暑いということだった。続くバスの中では、モロッコの学校についての説明があり、6歳から義務教育が始まり、3年生からフランス語学習が入り、高校生になると英語・スペイン語・独語が選択性となる等であった。日本語は無いんだね。

ところで、10月末からモロッコのナショナル・チームの監督に就任したトルシエについて、フワドに質問してみたが、もちろん彼もよく知っていて、とても給料が高く\$4万/月ということ。ひと月480万円！モロッコも2010年のワールド・カップ開催地に立候補したが、南アになってしまったとのこと。

バスは乾ききった山と岩砂漠という無機的な場所を進んで行ったが、時々、山頂の雪が白く輝く光景には、ホッとさせられた。

13時13分、目の前にカスバが見えてきてティネリールの町に入った。ズィズやザゴラなどに続き、この辺りで4番目に大きなオアシスの町という。右折してオアシスを右手に見ながら14km進んで行き、10分ちょっとするとトドラ川を渡り、右手に聖なる魚の泉（子宝の神様）を過ぎた。次第に高さが200～700mにも及ぶ赤茶けた崖が左右に迫り、ヨルダンのペトラを大雑把にしたような感じになってきた。トドラ峡谷のトドラとは源泉近くのベルベルの女性由来という伝説があるそうだ。

13時35分に、頼りない橋を渡ってトドラ峡谷にあるレストランに到着した。ここの食事は中々美味しく、特に、ミートボールの卵とじが美味であった。岩山の中腹に山羊がいて、ツアーの方たちからどうやって降りてくるのだろうかとか心配の声が上がっていたが、マウンテン・ゴートだから慣れているんだろうと思われた。

食後は川の中の源泉（少し温かい）を確認した後、奥の方まで歩いて行った。先ほどバスの中からロック・クライミングの光景を見たが、先の崖でも4～5人のロック・クライマーの姿を見ることが出来た。眺めているオランダ人に聞いたところ、彼らはヨーロッパから来ているらしい。お土産売りの子供（中～高校生位？）につかまり、サッカーを中心に日本のことをいろいろ聞かれ、バスのところまで来てしまった。



（ペトラの大型版といった感じの切り立った崖）

15 時 05 分にバスは出発し、ティネリールに戻って行ったが、トドラ峡谷のさらに奥の村にはベルベル版ロミオとジュリエットと言える、対立する部族の若者の悲恋物語があるのだそうだ。親に反対された男女が湖に身を投げたということだが、その伝説は今でも受け継がれていて、イスラム暦 9 月のお祭りの際には集団お見合いのイベントがあるという。

ここから派生して、庄司さんからモロッコの結婚についての話が続いた。モロッコでは母親がハمامに行って息子の嫁を捜すという話で、結婚のパーティーは 3 日間行われ、男女別々でハمامで行われたり、ヘンナをしたり等の説明があった。また、最近では恋愛結婚も増え、結婚年齢も高齢化しつつあるということであった。

15 時 30 分にオアシスを一望できる展望台のようなところでフォト・ストップとなった。



(ティネリールのオアシスと旧市街)

結婚の話をしていたが、すぐ右の墓地ではお葬式が行われており、ちょうど埋葬するところであった。墓地まで来るのは男のみという説明があった。

ティネリールの新市街を抜けバスは進んでいったが、庄司さんからはモロッコの結婚についてさらに詳細な説明が続けられた。結婚証明書はイスラム省から発行されるとか、初夜のシーツについての行事、結婚式の支払の割合や離婚した場合についても事前に取り決めがあるという話などであった。

16 時になると左手に銀山が見え、この辺りで採掘される金や銀はマラケッシュで加工されるのだそうだ。

16 時 20 分にブルマンダデスという村でフォト・ストップ



(ブルマンダデスのオアシスとダデス川)



(平山さんとツー・ショット)

10 分後に出発したが ‘サハラはモロッコの領土’ という西サハラ問題に対す

るスローガンも見えた(西サハラは、僕の高校時代スペイン領サハラであった)。

今日はカスバ街道のドライブということであるが、カスバについて、庄司さんから詳細に説明された。カスバというのは葦の意味で、カスバの建材としても使用されているそう。四隅の塔は耐震構造となっており、元々カスバはイエメンから伝えられ、この辺りは紀元前にイエメンから移住したと考えられているということであった。ベルベル人のお金持ちがカスバを造ったが、ノアの子供の子孫の可能性もあるという話も続いた。カスバは1階が倉庫、風呂、釜戸、台所、2階が客間、3階が家族用となっているが、現在はホテルやレストランとして使われているものも多いということであった。

17時にエル・ケラア・ムグーナという村を過ぎ、バラ水やエッセンスオイルをはじめとしたお土産店で休憩となった。この村では香りは良いが美しくないダマスкас・ローズが多く栽培されており、毎年5月にバラ祭りが行われ、その頃になるとシャネルをはじめフランスの化粧品会社がバラのオイルを買い付けに来るそう。バラ水のお土産も考えたが、ブランド物でないと喜ばれないだろうと思ってやめた。

20分弱の休憩後、「カスバの女」をBGMに進んでいった。‘ここは地の果てアルジェリア’とか、‘明日はチェニスがモロッコか’など、こんな歌がS30年頃流行ったなんて不思議な感じがした。でも、歌詞の内容から考えると、本来のカスバとは明らかに異なっており、カスバの意味を理解して作詞したのだろうか、と心配してしまった。竹腰ひろ子、美輪明宏などの「カスバの女」が続いたが、寺内タケシのインストルメントが良かった。

17時33分、バスの中よりモロッコの大地に沈んでいく雄大なサンセットを眺め、今日は日の出と日の入りを見ることができた。その後の残照の中をバスはカスバ街道を西に進んで行ったが、17時50分過ぎ、あまりにも夕焼けが美しいので、フォト・ストップとなって、じっくり観賞することができた。



(日の沈む国の夕焼けはプライスレス！)

“サハラの夕陽をあなたに見せたい♪”(「サンドベージュ砂漠へ」と中森明菜の歌が頭をよぎった。初日の出も嬉しかったが、この夕陽・夕焼けは、マグレブ(日の沈む国)へプライスレス・メモリーを求めてきた僕にとって、

何物にも代えがたいインプレッシブなものとなった。庄司さん、次からは、「カスバの女」だけでなく「サンドベージュ」も流してください！

18 時 05 分にスコーラ村を通過したが、夕焼けをバックにうす〜い新月とモスクのミナレットが映えていた。宵の明星も美しく輝いていた。また、夕焼けに映えるナツメヤシもエキゾチックに感じた。

18 時 30 分を過ぎると残照も消え、辺りは一気に真っ暗闇となって、うすい月や星々の輝きも輝いて見えた。車内ではワルサザードについての説明が始まり、人口 6 万人、『グラディエーター』や『アラビアのロレンス』をはじめ、多くの映画のロケが行われ、モロッコのハリウッドの異名もあるということだ。

18 時 45 分にホテル到着。



(ホテルにあった装飾用の椅子にちゃっかり座って)

夕食はホテル内のレストランでバイキング。元日ということで、特別に生の弦楽四重奏が流れていた。プリンが美味しくて、2~3 回おかわりしてしまった。この食事の際、鹿児島から来られた池田さん達と懐かしい話—天文館や喜入の石油備蓄タンク、錦海寿司とか、鹿児島中央教会、徳之島の泉重千代翁などに花が咲いた。24 歳のときだから、ちょうど現人生の中間点が鹿児島なんだなあ…。あれからもう 24 年も経ってるなんて、信じられない！

このホテルもコテージ風で、映画関係者（著名映画監督）もしばしば泊まるということであつたが、入浴途中でお湯が止まってしまい、少ないお湯に身体を横たえて浸けてしのいだ。

池田さんからお借りした充電器で、デジカメを充電したが、同じ機種なので本当にラッキーであつた！

1月2日（日） 快晴

9時にホテルを出発し、わずか2分でタウリルトのカスバに到着してフォト・ストップ。20世紀初頭のマラケッシュの司令官であったグラウイ家所有のカスバで、現在は博物館になっているという。『シェルタリング・スカイ』のロケで使用されたそう。グラウイ家はフランスがモロッコ維持を図る（独立運動を阻止）ため重用されたとのこと。



（透き通るような青空です！）

9時30分頃、バスはワルザザード川を渡ったが、車窓からハイ・アトラスの雪山が美しく見えた。ワルザザードはサハラ以南から来た人（黒人）が多く、1948年にモハメッド5世が幽閉されていたマダガスカルから戻ると、グラウイ家は没落していったという説明があった。グラウイ家の本宅は前方に見える雪山の方にあるという。

西へ10分ほど走ってティフルトゥットのカスバに到着した。まずは、全景をバックに写真を撮り、その後ゲートをくぐって前庭に進んだ。



このカスバもグラウイ家のもので、現在はレストラン・ホテルになっていて、グラウイ家の子孫が経営しているという。元々は吹き抜けだった（現在はカバーされている）1階は対称系に4つの部屋があるが、ベルベルの造りだと左右対称というのではないそう。ミント茶をごちそうになって休息した。



（階下から撮影）



（カスバの外観）

屋上のテラスからの眺めは素晴らしく、ワルザザードの町やハイ・アトラスの山頂に光る雪も美しかった。カスバ周囲には使用人の住居や家畜小屋、小麦畑も広がっていた。このカスバは『アラビアのロレンス』のロケにも使用されたという。できればこのようなカスバに1泊してみたかった！



(ティフルトゥットのカスバは高台にあるので眺めがグッドーハイ・アトラスも美しい)

10時10分過ぎにバスは出発すると、2~3分でCLAスタジオ(仏の映画会社)を過ぎ、左右に不毛の大地を見ながら遙か彼方のハイ・アトラス目指して進んだ。庄司さんから、数年前に地元の人が偶然、恐竜の骨を見つけたという話があり、塩の川を越え、左手に聖者の廟が過ぎると、アイトベン・ハッドゥはすぐであった。



(不毛の大地を抜けて、アイトベン・ハッドゥを一望するところでフォト)

新市街を抜けて川を渡って旧村に入った。右手の門は『ナイルの宝石』のセットであるという。オリーブや麦などの小さな畑やパン焼き釜戸の跡を見ていくと、右手の広場が『グラディエーター』の撮影で使われたアリーナであるという説明があった。



(ナイルの宝石のセットの門)

(アラビアのロレンスのロケも行われた)

迷路のような狭い道と階段を登っていくと、クサルが‘要塞化された村’であることが理解できるように思えた。将に、難攻不落の要塞といった感じが

した。

途中で種々のお土産が売られていたが、中でも、虫眼鏡を使って太陽光を集めて板を焼き、絵を描いているのが面白かった。



(お土産で絵が売られていた) (クサルを登っていくと美しい景色が広がっていった)



(頑張って見晴台まで上ると 360 度のパノラマ・ハイ・アトラスも美しい！)



(見張り台兼穀物倉庫のところでは地元の女の子からフォト代を要求されてしまった)

アイトベン・ハッドゥは、現在 8 家族のみが居住しているが、ここには水も電気もないということであった。その中の一軒ムーサさんのお宅を訪れ、ハمامやキッチンなどを見て、ゲストルームに案内された。ファティマさんが迎えてくれたが、帰りにしっかりチップを要求された(払わなかったけど)。



(キッチンではタジン鍋が！)



(ゲストルームの中は涼しい！)

外は暑いくらいでセーターも脱いでしまったが、部屋の中は涼しくて、夏な
どもこのような感じなのかな、と思った。表に出ると、学校から帰ってきたフ
ァティマさんのお孫さんに、持参したお土産のハブラシを渡して写真を撮った。
再び川を渡り、昼食のレストランへ向かった。途中、川面に写るアイトベン・
ハッドゥがとても美しかった。



(ファティマさんのお孫さん)



(川面に写る逆さアイトベン・ハッドゥ)

レストランでは“イバラキ？”と聞いてくるウェイターがいたが、彼の兄嫁
が茨城（水戸）出身であるとか。うちの嫁さんは水戸出身と話したが、“どこに
いるのかー日本でお留守番ー残念”という短い会話で終わってしまった。お昼
はベルベル風サラダとオムレツ、チキンのタジン鍋とお決まりのものであった
が、最後に、庄司さんから梅こぶ茶のサービスがあって嬉しかった。

13 時 25 分に出発して、一路ハイ・アトラスに向かった。道中はベルベルの
村や小さな段々畑、小さなお土産店なども見受けられた。14 時 18 分、路線バ
スが通っているイグレム村を通過したが、店の前にケバブ用の肉が吊り下げら
れているのが目に付いた。川で洗濯をする人々も見かけた。

14 時 30 分から 15 分のトイレ休憩。売店では化石をはじめタジン鍋などもモ
ロッコ特産品が売られていた。ティシュカ峠を目指して進むと、白い胡桃の木
が見えた辺りでは、絨毯や洗濯物を干している風景が見られた。ルイ 14 世は一
生のうち 2 回しか入浴しなかったという話があった。



(黒い大理石に盛り上がるように付いている化石)



(2260mのティシュカ峠)



アゲル・ムイス村を通過したが、この辺りで標高 2000m という。グラウイ家
の本家があるティルワットカスバに通じるといふ細い道を右下に見た直後、テ

ィシュカ峠に到着した。モロッコで車が通れる一番高い所で、2260mとのことだが、空気がヒンヤリと感じられた。

15 時 15 分に出発し、鉄分で赤茶けたり、コケや薄い植物で緑に見えたりする山肌を見ながら進んだ。1940 年にこの峠の道ができ、1945 年にフランスによって舗装されたそうだが、ヘアピン・カーブの連続で、ちょっとしたジェットコースターのような感じを味わえた。BGM にモロッコの民族曲が流されたが、‘モロッコ！！’と連呼して、耳障りであった。



(峠より見える雪山)



(峠を越えた後も美しい風景を楽しめた)



16 時 15 分、15 分間の休憩となり、その後はモロッコの言葉について説明された。‘暑いね’というのは‘私は今から行きましょう’で、‘少し’は‘オナラ’の意。日本で言う「心の底から」というのは「肝臓の底から」という意味で使うそうだ。また、サウジアラビアの方では通じないモロッコ特有の言葉もあって、‘あんたアホやな’というのは、あなたは私の兄弟とか親友‘という意味なのだそうだ。

アラビア語の話からーアルコールとかアルカリとか AL で始まる言葉はアラビア語由来が多いとか、コーラン（読むべきもの）について、庄司さんが熱心に説明してくれた。話は、「瞼のピクピク」は「ご無沙汰していた人に会える前兆」とかにも及んだ。

並木道が続いてマラケッシュに近いことを感じた。マラケッシュはフェズに続く 2 番目に古い都で、人口 130 万人。ムラビト王朝時代に都をフェズから移したという。“ここは泥棒が多いので早く出て行け”とキャラバン隊から言われたことが、マラケッシュの命名につながったという。また、モロッコの国名はマラケッシュから来たとも言われているそうだ。車窓からはハイ・アトラスが美しく見えており、アトラス越えが出来た喜びを感じた（ツアーによっては、アトラス山脈を越えないものもあるし・・・）。

17 時 30 分過ぎに城門内に入ったが、少し遅れてサンセットとなった。

ホテルはドイツ系のケルピンスキーで、部屋は結構広く、Wベッドが嬉しかった。ホテル内には“Karaoke”店があり、ベリーダンスをやっているスナック？もあった。

1月3日（火） 快晴

今日は僕の誕生日ーサーマ・サイーダ！

9時02分にホテルを出発しジャカランダの並木を通ると、正面に噴水とクトゥビアの塔が美しく見えた。モロッコの縮図と言われる古都マラケッシュは「赤い街」の異名があるように、旧市街の建物は赤土の日干しレンガで造られている。「赤い街」は冬暖かく、夏は涼しいということである。



（今日も抜けるような青空が広がった！）

9時15分に下車して、まずはザード王朝時代（16世紀）のスルタンらが葬られている霊廟を訪れた。ヘリコプターによって1915年に発見されるまで、その存在は分からなかったことから、破壊を免れていたという。狭い通路を抜けて中庭に出て、そこからメッカの方向を示すミヒラブがある部屋、12本の柱のある間、王妃たちの墓室を見学した。壁はモザイクで真ん中が漆喰、天井はアトラス杉というパターンであった。漆喰の部分にコーランの一節が刻み込まれていたが、アンダルシア地方の職人の仕事であるそうだ。また、建物内にある墓は高貴な人、外にあるのは位に低い人の墓で、小さいのは子供用、右側を下にしてメッカの方向を向いて埋葬されているという。タイルの向きの異なる墓は異教徒（キリスト教徒）のものであるということであった。



（ミヒラブはメッカの方向を示す）

（アル・マンスール王の墓）

ここは外国人観光客も多く、比較的混み合っていた。

その後、市場を通過して、10時15分にユダヤ人街へ出た（現在ではユダヤ人はほとんど住んでいない）。ヤマハやプジョーのバイク（足踏みで起動させる古いタイプ）が多くて危なかったが、ロバは少なかった。途中、パンを焼いてもらいに行く女性や、三菱マークの幌を付けたスズキの軽トラック、細い道の角々にはお恵みを求める老人やケガ人がいた。建物の上から湯気が出ているハمام

もあって、昼は女性用、夜は男性用ということであった。また、通りを利用して、民族衣装用の糸を紡ぐ風景も見かけた。10 分程でバヒア宮殿に到着した。



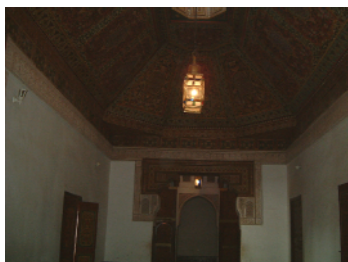
(市場にはロバはいなかった)



(バヒア宮殿前の絨毯屋)

バヒア宮殿の入り口では オレンジやバナナ、ポインセチア、ローズマリーなどの続く道を進んだが、気持ちが安らぐのを感じた。オレンジはホテルの庭にも実っていたが、この辺りのオレンジは酸っぱくて食べられないとのこと。

バヒア宮殿は大臣の建物として使用され、中庭に面したアンダルシア様式のウェイティング・ルーム～レセプション・ルーム（大臣へ謁見する間）～4 人の本妻の部屋（正面がバヒアさんの部屋）～23 人のハーレム～中庭と廻った。当時、女性は外に出られなかったので、中庭が重要であったとのこと。その後、パーティー・ルームを見て、再び中庭を抜けて小さめのハーレムの女性の部屋（ハーレムの女性が産んだ男児は大臣の位に就けなかった）～花の開かないハイビスカスの咲く中庭を抜けて、大臣の子供用のコーラン・スクールに辿り着いた。子供たちはハトの糞や羊の毛の油などを混ぜた墨で、まな板のようなものをノート代わりにしてコーランを覚えたという。大臣のプライベート・ルームを見て、先程のレセプション・ルームを抜けて出口に到った。



11 時 30 分に再びバスに乗車し、10 分程でクトゥビアの塔に到着した。この塔はミナレットとして造られ、ラバトのハッサンの塔、セビリアのヒラルダの塔とともに 12 世紀に建造されたという。中は 6 階建てになっていて、登ってアザーンを知らせるために、騎乗でも上られる様にラセン階段になっているとのこと（現在はスピーカーを用いている）。尖塔の先の 3 つのダンゴ（神・天使・人）の先には天国を示す矢印があった。右側に 12 世紀に建てられた古いモスク跡があり、ミヒラブ跡も壁にみることができた。左側が新しいモスクになっていて 5 千人が収容できるそうだ。

名物の水売りおじさんもいたが、現在もヤギの皮に入れて水を売っているそうだ（一杯 1DH、写真は 5~10DH）。ちょっと気持ちが悪いが、地元の子供たちはこの水を購入して飲むという。クトゥビアの塔をバックに集合写真が撮影された。

12 時にミラナ庭園に向かった。12 世紀のムワヒド朝時代に作られた広大な庭園で、ハイ・アトラスから地下水路で引いた水で貯水池が造られ、その周りにオリーブ畑が広がっていた。オリーブ畑はかつて 200ha もあったそうだが、現在は 80ha となっているそうだ。池の深さは 3m で、藻を食べさせるために鯉を飼っているとのことで、フワドさんから渡されたパンを撒いてあげた。この池は兵隊の水泳練習用としても使用されるとのこと。また、週 3 回行われる光と音のショー用の観客席が設けられていた。

バスに戻る際、前足を縛られたラクダが暴れていた。あのように執拗に暴れる動物を見ることは珍しいが、あのラクダは余ほど機嫌が悪かったのだろうか。バスを待っている際に、あちらこちらに警官や憲兵がいるのに気づいたが、国王が正月をマラケッシュの王宮で過ごしたので警備が厳しいそう（警官は紺色、憲兵は深緑色の制服だった）。



（メラナ庭園は広々として気持ちが良かった一天氣がよかったから？）

銀製品の店でお買い物タイムとなったが、興味がなかったのでモハメッドと話をして過ごした。彼が携帯の写真で彼女や家族を紹介してくれたので、僕もデジカメや携帯にある家族の写真を見せた。モハメッドは 9 人兄弟で、一番下は 5 歳とか。30 歳の彼女はカサブランカに住んでいると話していた。

お昼は中華で春巻が美味しかったが、ご飯はポロポロでひどかった！食後に、大阪に帰られるご夫婦が一足先に立たれた。飛行機でカサブランカに出て、明日の朝の便で帰国されるという。昨夜ホテルにいた日本語の上手な太ったモロッコ人ガイドが付き添って行った。

14 時 45 分にバスは出発し、庄司さんからモロッコのクッキーをプレゼントされた。‘ガゼルの角’という名のある細長い餃子型のものが美味しかった。

15 分程でバスを降りてスークを歩いた。少し行くとハمامがあり、10DH 払って、実際に中まで入ってみた。薄暗いのと、湯気でメガネが曇ってしまってよく見えなくなってしまったが、温かかった。

地元の民族楽器店、砥石屋さん（1 月半ばの犠牲祭に備えて刃物を研いでいる？）、ランプ店などを抜けて、スーク・シオーラ（皮屋通り）の標示を過ぎると、靴屋さん、皮なめしの工房、ラグビーやバスケのボール屋さんなどが続いた。右手の白い建物はクッパと言って、クーポラの起源となったという説明があった。少し下ってベン・ユーセフ・マドラサに入った。



（店先には種々のランプが）



（スーク・シオーラの看板）

14 世紀の王様の名に由来するこの神学校は 16 世紀に建てられ、1956 年まで実際に使用されていたとのこと。マグレブ諸国のなかでも特に大規模な神学校で、イスラム建築の最高傑作と言われているという。中庭には長方形のプールがあって、ホテル（ケルピンスキー）も同じような造りだったのを思い出した。このプールの水音のみで勉強に集中したり、夏の暑い日には冷却効果をもたらしたという。



（ホテルのプール）



（神学校のプール）



（美しい幾何学模様）



（モザイクタイルも綺麗）



（内部の装飾も見事）



（明るくて広い優秀な生徒の部屋？）

フェズの神学校（アッタリーン・マドラサ）と同様、学生の寄宿舍もあって、成績の良し悪しで部屋が決まるということであった。お利口でない生徒用の暗くて狭い部屋は気分も滅入ってしまうと思うが、夏は却って涼しくていいかもしれないと思った。

その後、クッキーやスリッパ、電気製品、真鍮・金属、サンダルなどを扱っているスークを歩いたが、時々‘さよなら’‘ありがとう’‘御徒町’‘秋葉原’‘こんにちは’‘安い、安い’などと声を掛けられた。バイクや自転車を避けながら、さらにジュラバなどの民族衣装や衣類、カバンや籠、ナツメヤシやアンズ、陶器などの店を見ながら、16時30分にジャマ・エル・フナ広場に出た。たくさんの屋台や露店が並んで活気があった。特に、ケバブを焼く香ばしい香りと煙は、喧騒の中であってホッと一息つくような懐かしさが感じられた。カフェ・グラシェの前で解散して自由行動となった。

まずは、カフェの2階に上り、休憩しながらフナ広場の全景を眺めた。バルセロナから来た観光客と少し話した後は、広場とスークを気ままに歩き廻った。かつて公開処刑場であったため、ジャマ・エル・フナ広場とは「死者たちの広場」を意味するそうだが、実際はその逆で、生気がみなぎる、活気ある広場で、毎夜1時頃までお祭り騒ぎが続くそうだ。



(カフェの2階からフナ広場の全景を眺めると、遠い異国にいることが実感できた)

アクロバットやベルベルダンス、コブラ使い、釣竿の先に付いた輪をジュースのビンに引っ掛けるゲームなどが行われていた。コブラの写真を撮ったら10DH要求されたので、もう1枚撮らせろと言って2枚で10DH支払った。さらにコブラを首に巻いて写真を撮らないかと誘われたが、多額のチップを要求されそうだし、何より気持ち悪いので断った。入れ歯売りもいるという話で、是非とも見てみたかったが、残念ながら発見できなかった。



(コブラを首に巻いて写真を撮らないかといわれたが…)

フナ広場の西にあるクトゥビアの塔は、夕陽を受けて輝きを増していった。

多くの方々は 17 時 15 分にホテルに戻ってしまったが、平山さん・片山さんご夫婦と僕の 5 人は残って、黄昏から夕闇へと移り行くフナ広場の喧騒の中に身を置き、深い思い出を作ることが出来た。屋台のケバブやエスカルゴも食べてみたかったが・・・。

クトゥビアの塔の向こうに夕陽が落ちていくと、フナ広場はますます活気に満ち溢れてくるように感じた。後ろ髪を引かれる思いで、18 時過ぎにバスに向かった。



(フナ広場の西にあるクトゥビアの塔の向こうに沈む夕陽は神秘的でもあった)

20 時 15 分にロビーに集合し、25 分頃に出発して、レストラン「シェ・アリ」に向かった。アリさんは元々はガイドをしていたが、お金持ちのイタリア人と逆タマ結婚し、モロッコの民族ショー“ファンタジア”を取り入れたレストランを经营するようになったという。現在はフェズに住むアリさんと奥さんの子孫が经营しているという話であった。バスを降りたところで、仙台から来られた松田さんからリクエストされていた星座の説明をしたが、もっと暗いとよく分かったのに・・・



(入口で騎馬兵と)

(民族衣装を着たちょっと太めの女性たちとのショット)

テント内での食事の際に、ベルベルの民族衣装を纏った太めの女性達の踊りや種々の楽器を携えた演奏など、次から次へといろんなのがやってきて、ちょっと落ち着かなかった。中には中学生くらいの女の子もいたが、少し長すぎて飽きてしまった。同業の大先輩である平山先生の奥様は北海道出身で、ピップエレキバン（注）の CM に出た比布の話が出てきたが、昭和 55 年（5 年次）の夏休みに比布駅でスタンプをもらいに行った場面が思い出された。夜 23 時過ぎの夜行列車の短い停車時間に、駅員さんが“いちごとスキーの町、比布町”というスタ

ンプをわざわざ出してくれたなあ・・・。

食事はタジンとクスクスがメインであり、代わり映えしない内容であったが、ここのオレンジはとっても美味しかった。でも、やはり、フナ広場の屋台で食事してみたかったなあ！　ところで、どうしてモロッコのクスクスは不味いのだろう？　シチリアで食べたのは旨かったのに！



(誕生日なので、頑張って踊りました)

(ファンタジアショーの鉄砲には驚いた)

ゆっくりとした食事が終わって、23 時からのショーを見るために外の観客席に移動したが、石段の上に薄い絨毯が敷いてあるだけで、とても寒かった。ショーが始まって会場の灯が落とされると、星がきれいに見えて嬉しかった。

客席の子供が幌付のラクダに乗って一周した後、馬の曲乗りや、おへそを見せないけど寒そうなベリーダンスなどが続いた。騎馬兵が放った鉄砲の音で、少し眠かった目がすっかり覚めてしまった。最後は仕掛け花火で 2006 何とかという文字が浮かび上がり 30 分ちょっとのショーは終了となった。



(‘ 2006 年おめでとう ’ とか書いてあるのかな？)

場内にあった焚き火で暖まってからコブラの看板の前に集合して、12 時ちょっと過ぎにホテルに到着となった。ショーも良かったけど、あのままもう少しフナ広場にいて、あのような場所で食事もしてみたかったなあ。

部屋では帰国に備えて荷物整理をし、ゆっくり入浴して 1 時半頃眠った。

1 月 4 日 (水) 晴れ

10 時半までに朝食ということで、少しゆっくり起床し、荷物の整理をしてから 9 時半頃レストランに行った。今日も爽やかな好天で、これで旅行中はずっと好天に恵まれたことになり、本当にラッキーであった。

11 時 40 分にホテルを出発して、マラケッシュの空港に向かった。空港でチ

ケットの手配等をしている間 1 階にあるアクセサリーの土産店を覗いていると、店の若者から “Japan!” と声を掛けられ、“Nakada, Nakamura” と続いてサッカーの話となった。話がトルシエ監督に及ぶと、彼から年末にモロッコのナショナル・チームの監督を解雇されたということを聞き、10 月末に就任したばかりだったのに、と話し込んでしまった。トルシエの厳しい指導はモロッコのチーム体質に合わなかったらしい。“白い呪術師” はわずか 2 ヶ月で解任となってしまう。

フワドには、次にモロッコに来るのは少し先になると思うが、その時もしモロッコ観光局のプレジデントにでもなっていたら、いろいろ便宜を図ってくれとお願いして別れた。ショックラン！

空港はスペインからの観光客が多いようだった。免税店で買い物をして、フライトを待ち、AF3357 便は 14 時 25 分に離陸した。一番前の窓際であったので、アトラスの雪山が美しく輝くのが見えた。程なくして地中海上空に達し、ヨーロッパ大陸に入ってしまったら暑くすると暑い雲が眼下を多い、パリは寒いんだろうなと思った。

1 時間の時差があるパリ時間 18 時 25 分にオルリー空港に到着した。

19 時 20 分にバスが出発し、土屋さんという現地のガイドから、パリの道路が混雑しており、パリ市街から南に約 20km 離れているオルリー空港からシャルル・ドゴール空港（北に約 30km 離れている）まで、通常なら 1 時間だが…という説明があった。庄司さんからは、マイクを握っての最後の挨拶があり、今回のツアーを順に振り返ってくれたが、思いのほか早くシャルル・ドゴール空港に到着してしまい、話が途中で終わってしまった。

フライト待ちの間、娘から頼まれたレスポのバッグやチョコレート等のお土産を買ったり、ラウンジで軽食を摂ったりして過ごした。

AF278 便は 23 時 15 分に離陸した。往路と異なり、180 度になる座席だったので嬉しかった。隣席はルノー・日産に勤務するペニー・ダニエルという 30~40 代のフランス人で、カルロス・ゴーンの手下であった。飯田橋に住んでおり、また、うちの娘が渋谷まで通学しているということで話が弾み、メールアドレスの交換もし、機会があったら飲みに行くということになった。

グローバルのアンケートを庄司さんが回収するとともに、スーツケースの宅配券が配られた。エール・フランスの食事は不味いので、少し食べた後は眠ってしまった。

1 月 5 日（木） 晴れ

目覚めると、そろそろシベリアを抜ける頃であった。

予定の日本時間 19 時より少し前に第 1 ターミナルに到着した。

19 時 30 分に税関を通過し、皆さんに挨拶をして帰路についた。鹿児島からいらした池田さん一行が中々出て来られなかったのも、名刺の裏にお別れのメッセージを残して ABC の係に託した。20 時発のスカイライナーに飛び乗って車窓から見上げると、日本の夜空にも美しい三日月が輝いていた。それはモロッコで見たものよりちょっぴり太っていた。

あとがき

「モロッコに行ったんだって？」→「そんな昔のことは忘れた！」とならぬよう、怪しげな記憶力をベースに、自分でも読めないような走り書きのメモから、この旅行記を書いてみた。通常なら 1～2 週間程度で終わるのが、今回は庄司さんのガイドが懇切丁寧でたくさんの知識を詰め込まれたり、デジカメ画像也多めに取り入れたため、だいぶ時間を要してしまった。とにかく、恒例の旅行記を書き上げないと、僕の旅行は終了しないので、次第に気合が入ってしまい長編になってしまった。

『カサブランカ』『アラビアのロレンス』といった名作に思いを馳せ、フェズやマラケッシュの迷宮の喧騒にとまどい、砂漠の神秘とトドラ峡谷の雄々しさに感銘し、何より夕焼けの美しさを再認識できた今回のモロッコ旅行は、深く、強く胸に刻まれ、インプレッシブなものとなった。将に、プライスレスと言えよう。それにしても、今年は寒さが厳しい…。

平成 18 年 1 月 31 日

鹿島 健司